

実名開示を重視した SNS（千葉大校友会 SNS）の実状と課題

大塚成男*1・檜垣泰彦*2・櫻井貴文*3・進藤啓介*4
Email: ohtsuka@le.chiba-u.ac.jp

- *1: 千葉大学法経学部
- *2: 千葉大学大学院工学研究科
- *3: 千葉大学大学院理学研究科
- *4: NPO 法人 TRYWARP

◎Key Words SNS, 実名開示, 同窓会活動

1. はじめに

千葉大校友会 SNS「Curio」は、千葉大学関係者（卒業生、教職員、在校生）による人的ネットワークの維持・拡大を目的とした SNS である。「Curio」では、プロフィール上での実名開示を徹底しており、各会員の氏名の入力には会員の登録時点で事務局が行い、その修正の権限も事務局のみに与えられている。したがって、会員本人であっても氏名データの修正・非公開化はできない。本報告は、実名開示を重視した SNS である「Curio」の活動実態と今後の課題に関する実践報告である。

2. 実名開示の理由と運営体制

「Curio」は、学部・研究科ごとに設立されてきた同窓会の連合体である千葉大校友会が構築・運用している SNS であり、卒業後や退職後には個人や小規模なグループとして離散している千葉大学関係者を相互に結び付け、千葉大学との紐帯を保つ手段を提供することを目的としている（図1）。2010年5月31日時点の「Curio」の会員数は2,276名であり、1カ月あたりのページ・ビューは10,000前後である。

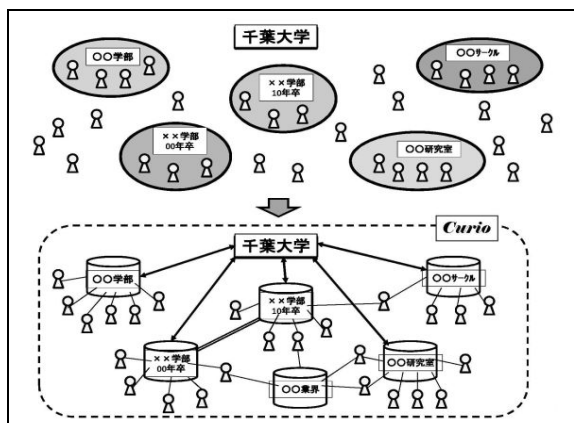


図1 「Curio」の役割

千葉大校友会による SNS 構築の契機は、2005年4月の「個人情報の保護に関する法律」の全面施行であった。各同窓会の主要な事業であった名簿の作成・配布は、すべての卒業生から名簿掲載の承諾を得ることが現実には不可能であるため、実施が困難となった。そこで、利便性と個人情報の保護を両立し得る手段と

しての SNS に注目し、独自に同窓会名簿の代替物として SNS を構築する取り組みが始められた。そして、2007年1月からの仮運用を経て、2007年10月に正式に開設されたのが「Curio」である。

同窓会名簿の代替物として構築されたことが、「Curio」において実名開示を徹底していることの最大の理由である。実名開示がなされなければ「Curio」は名簿としての機能を果たすことはできず、千葉大校友会が管理・運営を行う意義もない。

ただし、実名開示は個人情報漏洩のリスクを伴う。そこで「Curio」では、情報漏洩のリスクを高める部外者の入会や「なりすまし」を抑止するため、会員登録にあたっては事務局で証拠書類に基づく審査を行っている。また、継続的なモニタリングを実施し、不適切な個人情報の利用を監視する体制も整備している。

なお、登録するのは会員の在学・在籍時代の氏名である。結婚等で改姓している場合には、改姓後の氏名はプロフィールに任意で書き入れる。

3. 実名開示を巡る議論とその含意

「Curio」ではその成立経緯からも実名開示が運営上の前提となるが、仮運用の期間中には、特に在学生である会員から、実名を開示することへの強い反対意見が表明された。

実名開示への反対の理由とされていたのは、①多くの SNS で匿名化が進んでいる点、②実名開示を行っても「荒らし」を防ぐことはできない点、および③開示されている実名が悪用される危険性がある点であった。しかし、広告媒体としての性格を有する商用 SNS はビジネスとして成立するうえで匿名化による短期間での会員拡大が必要であるが、同窓会名簿の代替物である「Curio」にはその必要がない。また「Curio」における実名開示は、「荒らし」防止を主たる目的としているわけではない。あくまでも「Curio」が卒業生名簿としての機能を果たすことが目的であり、不適切な非難・中傷等が抑制されることへの期待はあるものの、「荒らし」が防止できなくとも実名開示の必要性が損なわれるわけではない。そして、実名情報が悪用される危険性は否定できないが、実名開示が行われず名簿としての機能を果たせない「Curio」に対しては千葉大校友会が構築・運営を行う意義はない。したがって、これらの反対意見が表明された原因は、「Curio」という SNS

の趣旨が十分に理解されていなかったことにある。

このような実名開示を巡る議論からは 2 つの含意が得られる。

第 1 に、実名開示を成立させるためには SNS という手段の目的・趣旨を会員に対して明確にすることが非常に重要となる。SNS で実名開示に否定的な利用者はサイト固有の事情よりもインターネット全般に関わる理由を強く意識していることが指摘されているが、「Curio」を巡る議論でも同様の傾向を読み取ることができる。実名開示に反対する意見の多くは「Curio」の特殊性を踏まえたものではなく、既存の商用 SNS に対するイメージや「インターネットならば匿名」という思い込みに基づいていた。実名開示を徹底するうえで、ただ SNS を作るというだけでなく、SNS という手段を通じて何を實現しようとしているのかについての共通理解を確立することが求められる。

そして第 2 には、日常生活において他の会員と直接的な接触のある会員と接触のない会員では、SNS に対する姿勢に大きな違いがある。「Curio」における実名開示を巡る議論で反対意見を表明していた会員の大多数が在學生であったことは、日常的に接触のある在學生は SNS に非日常的な、言い換えれば直接顔を合わせてはできない交流を期待していたためであると考えられる。日常的に他の学生と直接の接触がある在學生には、個人を特定される情報の開示は極力避けたいと考える傾向がある。一方、日常的に他の会員と接触することができない会員には、相手が誰であるのかを知りたいという傾向がある。「Curio」は日常的には接触できない会員（卒業生、退職者）を重視するという方針を採ったことで実名開示を徹底することができているが、これらの 2 種の会員が混在する場合には、運営方針の決定が困難なものになることが予想される。

4. 実際の利用事例

「Curio」において実名開示が徹底できる理由としては、「Curio」が有する次の 2 つの特性があると考えられる。第 1 には、「Curio」が、人的関係をまったく新しく構築することよりも、千葉大学在籍時に形作られた関係を維持・拡大することを目的としている。すでに相手を知っていることが前提であるため、匿名性が求められる度合いが低い。そして第 2 には、同窓会月報に相当する連絡手段としての性格が強いため、会員に毎日のように閲覧することを促すための「遊び」の要素を高める必要はない。そのため、娯楽性を高めるための匿名性を導入する必要もない。したがって現時点においては「Curio」における実名開示を見直す必要性はないと考えている。

実際の「Curio」の利用においても、まだ数は少ないものの、実名開示を活かす利用事例が生まれつつある。

1 つは、千葉大学関係者の消息情報の照会である。具体的には、卒業後相当期間が経過した卒業生が書き込んだ会員から恩師の消息に関する問い合わせに対して、複数の会員が情報の提供が行われた。その中で、卒業年次や学部は異なるものの同一の教員との交流があった会員間の人的な関係も形作られた。

また、公開された Web サイトと「Curio」とを併用し

つつ、「Curio」では実名が公開されることを活かそうとする取り組みもある。法経学部同窓会では、独自に開設している公開の Web サイトでは「Curio」への登録を促す告知を行い、具体的な情報提供は「Curio」の中で行っている。それにより、実名を挙げての総会議事録や詳細な決算資料が提供できており、掲示板を用いた同窓会事務局と同窓会会員との双方向での意見交換も少ない管理負担で実現できている。

5. 課題と今後に向けた取り組み

実名開示を重視した「Curio」の運営は一定の成果をあげつつあるが、実名開示を徹底している場合の課題も明らかになってきた。特に、情報を受ける側に立とうとする受動的な姿勢が強い会員が多くなり、積極的な情報発信やコミュニティの立ち上げをしようとする会員が少ない点は問題であると考えている。前述したように、「Curio」においては卒業生によるコミュニティの構築とそれらのコミュニティの相互連携による人的ネットワークの構築を目指している。それゆえ会員によるコミュニティ構築が進まないことは、「Curio」に期待されている機能を大きく損ねる危険性がある。

会員の受動的姿勢の一因には実名開示が「目立ちたくない」という意識と結びついている点があると考えられる。しかしここまで述べてきたように、「Curio」においては匿名化によって会員の心理的障壁を取り払うという選択肢は採り得ない。そこで、事務局主導でモデル的なコミュニティを立ち上げ、その活動を提示することで会員にも独自のコミュニティの立ち上げを促すことを試みている。具体的には、学生有志と大学の就職支援部門の協力も得て、在學生と卒業生が就職活動についての情報交換を行うコミュニティを設け、その活動を通じて業種別等の派生的なコミュニティを増加させていくことを考えている。

6. おわりに

SNS を用いたインターネット上での人的交流は今後も大きな意味を有している。ただし、SNS 構築にあたって匿名性への対応が検討課題になってきた。本報告では千葉大学校友会 SNS 「Curio」の活動を実名開示という観点から検討した。SNS で実名を公開することが当然であるとは言えない状況になっている中で、「Curio」の活動からは、SNS を匿名性のない人的交流の手段として整備・活用していくうえで目的に関する共通認識の確立や会員構成の検討が鍵となることを改めて確認することができる。

参考文献

- (1) 川浦康至, 坂田正樹, 松田光恵: “ソーシャルネットワーク・キング・サービスの利用に関する調査”, コミュニケーション科学, 23 号, pp.91-110 (2005).
- (2) 大塚成男, 檜垣泰彦, 桜井貴文, 市川智一, 吉野貴之: “千葉大学校友会 SNS 「Curio」の構築”, 電子情報通信学会総合大会 分冊「情報・システム(1)」, D-9-29 (2009).